

実践
事例生徒が学びを選択できる「学校らしくない学校」で、
一人ひとりの心身の安定と学びを支える

岐阜県岐阜市 教育委員会、岐阜市立草潤中学校

岐阜県岐阜市 プロフィール

◎清流長良川と織田信長公ゆかりの岐阜城がそびえる金華山を擁した緑豊かな城下町。長良川の鵜飼が全国的に有名。2015年4月、『信長公のおもてなし』が息づく戦国城下町・岐阜」が、文化庁の日本遺産第1号に認定された。

人口 約40万3,000人 面積 203.60km² 市立学校数 小学校46校、中学校23校、特別支援学校1校、高校1校 児童生徒数 約2万9,500人 教員数 約1,800人 電話 058-214-7155(学校指導課)

岐阜市立草潤中学校 プロフィール

◎2021年度、東海地区で初の公立の不登校特例校として開校。校名は、中国の戦国時代の儒学者・荀子の言葉、「玉、山に在れば、草木潤い、淵に珠を生ずれば、岸枯れず」に由来する。学校説明会や生徒募集、視察の受け付けなどは、教育委員会が担当。

校長 井上博詞先生 生徒数 43人 学級数 3学級 教員数 18人



岐阜市教育委員会
学校指導課 主査

車戸良成

くるまど・よしなり

岐阜市立中学校教諭を経て、
2021年度から現職。



岐阜市立草潤中学校 校長

井上博詞

いのうえ・ひろし

岐阜市教育委員会不登校特
例校設置準備室長等を経て、
2021年度から現職。

※プロフィールは、取材時(2022年3月)のものです。

学びの場所・教科・内容を
生徒が自分に合わせて選択

2021年4月、「ありのままの君を受け入れる新たな形」をキャッチフレーズに、年間授業時数を770時間に設定^{*3}した不登校特例校として、岐阜市立草潤中学校が開校した。

同市には、不登校の中学生の数が例年約400人いたことから、かねてから支援策を模索していた。2017年の教育機会確保法の施行を受け、京都府の不登校特例校を視察したことを機に、不登校特例校の設置を決定。2020年度、岐阜市教育委員会(以下、市教委)に設置準備室を設け、開校に向けて動き出した。

同校の制度設計に際しては、全国の不登校特例校等を視察するとともに、大学教員や小児科医、県内の私立の不登校特例校である西濃学園中学校などからも助言を受けた。そして、自立支援教室やフリースクール、中学校時代に不登校を経験した通信制高校に通う生徒などの意見も聞きながら、「学校らしくない学校」をコ

ンセプトに学校づくりを進めた。設置準備室の室長を務め、開校と同時に校長に就任した井上博詞校長は、同校の基本方針を次のように語る。

「不登校に至る背景や欠席の状況などは生徒によって様々ですが、何事も一律に進みがちな学校生活に、違和感や苦手意識がある点が共通しています。そこで、統一したものを極力設けず、選択肢の中から生徒が選べるようにしました(図3)。それが、自分が認められているという安心感となり、心身の安定にもつながっていると感じます」

1日の学び方も、①家庭学習が基本のモデル、②家庭で学習し、週に数日

登校するモデル(P.25図4)、③毎日登校するモデルの3つを参考に、生徒が自分で決める。学期途中での変更も可能だ。また、学年ごとに時間割はあるが、学習内容が自分に合っていないと感じたら、他学年の授業に参加したり、デジタル教材を使って個人で学びを進めたりしてもよい。

同校が目指す学びの場を実現するためのキーワードは4つある。

1つめは、**心身の安定**だ。学校らしさを感じると不安感を抱く生徒がいることから、黒板はホワイトボードに変更し(P.25写真1)、他者の目に触れずに学習できるよう、Eラーニングルームには個室を設けた。また、生徒

図3 学校の特徴

校則・校歌・制服	いずれもなし。特定の体操服もない
学校行事	入学式・卒業式以外に、特定の行事はなし
担任制	個人に担任がつく。5月に生徒の希望で決定。その後も2か月に1回、希望を聞く。年度途中の変更も可能
定期考査	期末試験を実施。希望者のみが受ける(2021年度は20人前後が希望)
通知表	①通常の学校と同様に観点別学習状況の評価と評定、②評定はなく、文章による所見、③評定と所見の両方、の3パターンから、生徒・保護者が教科ごとに選択する

※草潤中学校への取材、提供資料を基に編集部で作成。

*3 通常校の年間授業時間数は1015時間。

が個々に担任を選べる個別担任制を採用。2021年度は、9人の教員がそれぞれ生徒を2～6人ずつ受け持った。

2つめは、**1人1台端末を活用した個別最適な学び**だ。授業はすべてオンラインで生配信しており、生徒は家庭や、教室以外の特別教室など、好きな場所において（写真2）、参加できる。国語、数学、英語は、複数の教員が支援しつつ、デジタル教材も活用して、個々のペースで学びを進められる。

3つめは、**自分の新たなよさを発見する学び**だ。音楽、美術、技術・家庭を1つにまとめた教科「セルフデザイン」を設置。学習内容で共通範囲のものは行われるが、それ以外

の時間は、自分が興味を持ったこととことん取り組めるようにしている。

4つめは、**社会との絆を感じる学び**だ。地元JAと協力した野菜づくりや、洋服の仕立て職人を講師に迎えた被服の授業など、地域住民から学ぶ機会を設けている。

そうした個別最適な学びを生徒がスムーズに開始できるよう、始業時には「ウォームアップ」として、生徒は担任とその日の学びの予定を確認。終業前には「クールダウン」として1日を振り返る。家庭学習の日はそれらをオンラインで行い、担任が学習内容を確認できれば出席扱いとする。

そのように、生徒一人ひとりの心

身の安定を大切にし、自分のよさや可能性を発見して、自分らしい新たなライフプランを描く学び（図5）を実現している。

在籍校と連携したコース制度で入学・転入しない生徒も支援

市内全域が通学区の同校では、市教委が学校説明会・学校体験会の開催や、入学・転入の手続き等を担う。

開校に向けて2020年度に行った学校説明会には、募集40人に対して200人以上が参加した。支援のニーズの多さを感じたことから、市教委は急きよ在籍校に籍を置いたまま支援する仕組みを考案。草潤中学校に週1日登校し、50分間の個別支援をするコース（25人）、オンラインで週1～2回20分間支援するコース（25人）を設けた。

そして、入学・転入等の希望者と、その保護者との面談や、在籍校から提供された出欠や学びの状況、担任の所見などを踏まえ、市教委やエールぎふ^{*4}、小児科医、草潤中学校が、一人ひとりに適切な支援を検討し、受け入れる児童生徒を決定した。学校指導課の車戸良成^{くろまど}主査は、本人の学ぶ意欲を大切にすると語る。

「児童生徒と話す、『オンラインで学びたい』『週3日でも学校に行きたい』など、学びにどのような思いを持っているかが分かります。在籍校と本人の関係も踏まえて、選抜ではなく、本人の学びのために草潤中学校への入学・転入がよいのか、在籍校での学びを継続しつつ、草潤中学校での支援を受けるのがよいのかを判断しました」

入学・転入等の希望者は県内外からあったが、入学・転入及び通級支援コースに決定する場合は市内在住を、オンライン支援コースに決定す

図4 1週間のモデル：家庭で学習し、週に数日（火・木の2日）登校する場合

		月	火	水	木	金
始業	9:30					
ウォームアップ	9:35～9:45	オンライン・ウォームアップ	ウォームアップ	オンライン・ウォームアップ	ウォームアップ	オンライン・ウォームアップ
1	9:55～10:45	家庭学習	国語	家庭学習	英語	家庭学習
2	10:55～11:45	家庭学習	数学	家庭学習	理科・社会	家庭学習
昼食	11:50～12:15					
昼休み	12:15～12:30					
3	12:30～13:20	家庭学習	セルフデザイン	家庭学習	総合的な学習の時間	家庭学習
4	13:30～14:20	オンライン学習		オンライン学習		オンライン学習
クールダウン	14:25～14:35	自分でクールダウン	クールダウン	自分でクールダウン	クールダウン	自分でクールダウン
終業	14:35		15:00～15:15 オンライン・クールダウン			

家庭学習を基本とする場合は、上記の週2日程度の登校日も家庭学習とし、毎日登校する場合は、週5日の時間割が組まれている。
*草潤中学校の提供資料を基に編集部で作成。



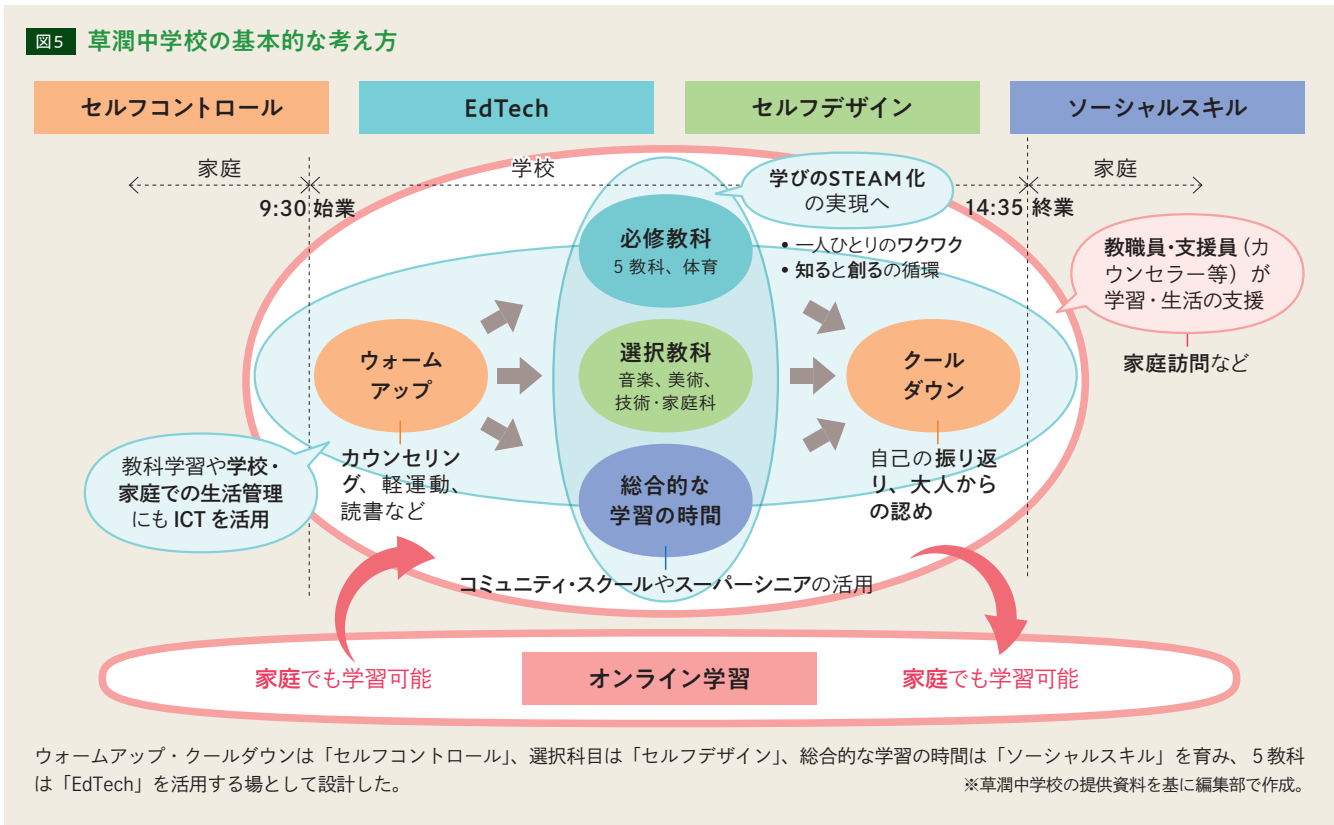
写真2 生徒は、自分の好きな場所で学習できる。ただし、生徒がどこにいるかを、教員が把握できるよう、廊下にある教室配置図「イマこボード」に、自分のネームプレートを貼る形とした。なお、給食はなく、弁当を持参するが、どこで誰と食べるのかも自由だ。

写真1 校舎は、閉校した小学校を改装。黒板にはホワイトボードシートを貼り、机と椅子は可動式とした。教室においても、他者の視線を感じたくない時には、ホワイトボードを動かして、パーティションとして活用する。



*4 岐阜市子ども・若者総合支援センターの名称。子ども・若者に関するあらゆる悩み、不安の相談に対応する、子ども家庭総合支援拠点であり、首長部局に所属する。

図5 草潤中学校の基本的な考え方



る場合は県内在住を条件とした。また、入学・転入等の希望に応えられなかった児童生徒には、より個別の支援が受けられるよう、関係機関との連携等を提案した。

開校初年度は、1年生13人、2年生12人、3年生15人で始まった。当初は、約半数の生徒が週2～3日の登校を希望していたが、1か月後には、7割弱の生徒が毎日の登校を希望するようになった。

「年間を通じて生徒の6～7割が毎日登校しました。登校できるようにすることが本校の目的ではありませんが、登校は本校への安心感の表れだと捉えています」(井上校長)

後期からは、生徒の希望で放課後に1時間の学習時間を設け、学校に残って学習できるようにした。さらに、学校行事を行う予定はなかったが、生徒たちから「この学校の仲間となら旅行に行きたい」といった提

案があり、生徒が自ら水族館への日帰り旅行の計画を立て、実行した。

また、週1回の通級支援コースでは、同校への通学に慣れていくうちに、在籍校の相談室に通えるようになった生徒もいるという。

目指す生徒像は1つではない。一人ひとりの自立を支える

1期生の3年生15人は全員、全日制または通信制の高校に進学した。進路指導は、内容も時期も学年で統一した形では行わず、生徒一人ひとりの状況を見ながら対応した。

2022年度は、複数の通信制高校の教員を同校に招いて学校説明会を実施し、市内全域の中学3年生・保護者の希望者が参加できるようにする予定だ。不登校の生徒は、進学先に通信制高校を選ぶ場合が多いが、一般の中学校では、通信制高校の話を

直接聞く機会は多くない。不登校特例校の同校が、通信制高校の学校説明会の会場となることで、市内の不登校生徒の支援につなげたいと考えている。

設置準備からかかわってきた井上校長だが、不登校支援の専門家ではないという。自身の学校教育への固定観念を取り払うことは難しく、様々な人の意見を聴きながら、学校を形づくり、今も道半ばだと語る。

「一般に学校は、目標として目指す生徒像を掲げますが、本校にはそれがありません。卒業時の姿は、生徒それぞれにあるからです。もちろん、生徒の自立を願っています。しかし、そこに規準はなく、他者と十分な会話ができなかった生徒が他者と話せるようになったのなら、それは1つの自立です。社会に出てからも自ら成長していける、一人ひとりの生徒の自立を支える学校づくりに取り組んでいきます」